



ジクトルテープについて

緩和ケアセンター 緩和薬物療法認定薬剤師 山田 真裕

非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs:Non-Steroidal Anti-Inflammatory Drugs)は、最も一般的な鎮痛薬として、多くの患者に使用されている医薬品です。

代表的な薬品として、ロキソプロフェンやセレコキシブ、ジクロフェナクなどが挙げられ、鎮痛、解熱、抗炎症作用を有します。

NSAIDsはシクロオキシゲナーゼ(COX)を阻害し、効果を発揮しますが、その過程において、臓器恒常性の維持に必要なプロスタグランジンの産生も阻害してしまうことにより、胃腸障害や腎機能障害などの副作用が現れてまいります。特にNSAIDsを長期に処方する時には、副作用対策や定期的な採血によるモニタリングが重要となります。

6月末から、がん患者の疼痛時に処方できるNSAIDsの貼付剤として「ジクトル®テープ」が採用となりました。ジクトル®テープは皮膚を経由して血液内に吸収されることにより、飲み薬同様、全身作用を示すのが特徴です。

【商品名】ジクトル®テープ75mg

【成分】ジクロフェナクナトリウム

【効能又は効果】各種がんにおける鎮痛

【用法及び用量】通常、成人に対し、1日1回、2枚(ジクロフェナクナトリウムとして150mg)を胸部、腹部、上腕部、背部、腰部又は大腿部に貼付し、1日(約24時間)毎に貼り替える。なお、症状や状態により1日3枚(ジクロフェナクナトリウムとして225mg)に増量できる。

※主な相互作用や副作用は、経口剤と同様です。貼付剤特有の副作用として、貼付部位の搔痒感や紅斑などがあります。

今後、経口投与ができない患者に対するNSAIDsの1つの選択肢として有効かもしれません。



こころと上手く付き合う工夫

緩和ケアセンター 臨床心理士 兵頭 憲二

「また来週」。別れ際によく使う挨拶です。1週間後の再会が前提とされています。TVドラマ、週刊誌などで「来週が待ち遠しい」という経験をしたことがある方も多いでしょう。私たちの文化において「週1回」は馴染み深い時間間隔のようです。

私たち心理士が普段行っている心理面接・カウンセリングは、患者さんと事前に話し合い、行う時間や場所、週に何日お会いするか、1回につき何分間お会いするかなどを取り決めた上で行うのが一般的です。こうして取り決めたものを「設定」あるいは「構造」と呼んでいます。こうした「設定」が一定の舞台となり、その舞台の上で患者さんのこころを巡る物語が繰り広げられていきます。舞台がなかったりあまりに不安定であったりすると、役者は安心して演じることが難しくなるでしょう。また、その舞台上で何が起きているかはわかり難くなるでしょう。舞台はできるだけ安定してほしいものです。

さて、あなたはどんな「設定」の上で日常を生きておられるでしょうか。その「設定」はどのくらい安定したものでしょうか。退屈を感じている時にいつもと違う帰り道を通ると気持ちが弾むことがあるように、あえて「設定」を崩すことが良い刺激となることがあります。その一方で、悲しいことがあって落ち込んでいる時、何だかソワソワとして落ち着かない時など、こころが不安定な時には、「設定」が安定していると落ち着きを取り戻しやすくなることも多いものです。

何時にどんなものをどれくらい食べるか。何時にどこで寝て何時に起きるか。いつどこで誰とどんな楽しみを持つか。無理なく「設定」を工夫しながら、こころと上手く付き合っていきたいものです。



11/27(土) 緩和ケア研修会を開催します

がん対策基本法に基づくがん対策推進基本計画では、「すべてのがん診療に携わる医師が研修等により緩和ケアについての基本的な知識を習得する」ことが求められています。当院では、地域がん診療連携拠点病院として、今年も11月27日(土)に緩和ケア研修会を開催いたします。この研修を修了された医師は、「がん患者指導管理料」「がん性疼痛緩和指導管理料」の算定が可能となります。従来は2日間の集合研修が必須でしたが、e-learningと1日の集合研修の受講と変更され、より受講しやすくなっています。医師だけでなく多職種に参加による中身の濃い充実した研修会を目指しています。

研修の詳細につきましては、緩和医療学会のホームページや電子カルテのMy Webをご参照下さい。お申込みは、事務局経営企画課(担当高橋)まで、宜しくお願いいたします。多数のご参加をお待ちしています。